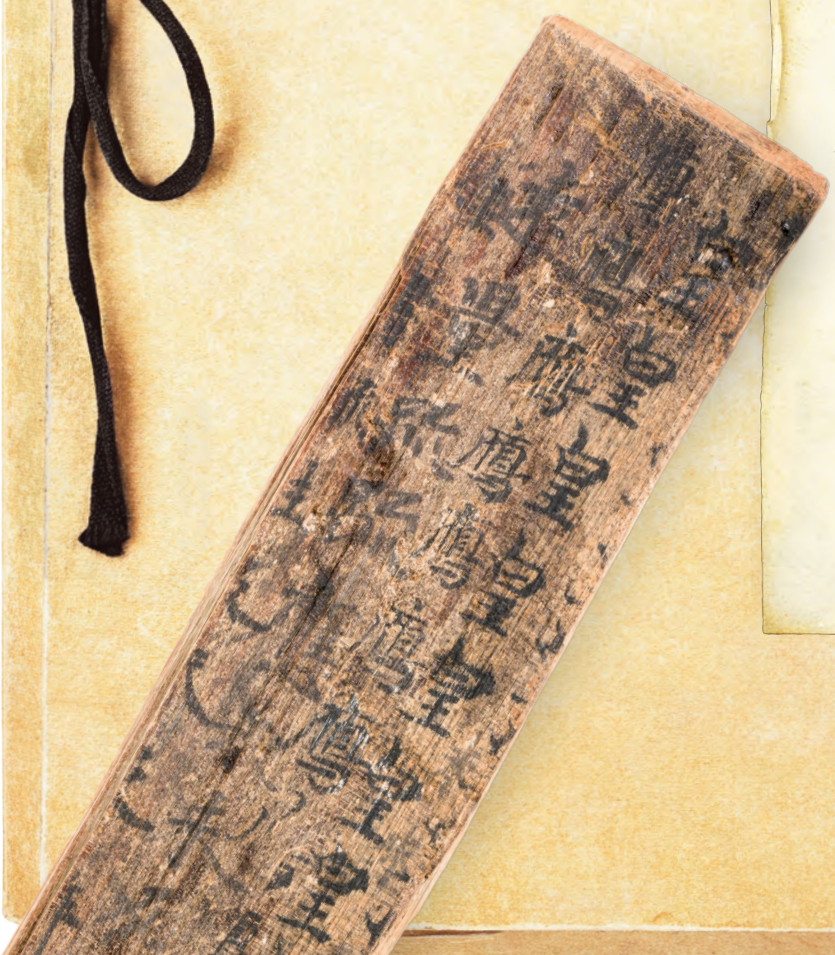




平成 25 年度 平城宮跡資料館 秋期特別展

地下の正倉院展

— 木簡学ことはじめ —



いあいやり

二〇〇七年より毎年開催している「地下の正倉院展」も、今年で七回目を迎えました。今回も三期にわたり、合計八〇点以上の木簡を出品いたします。木簡はとも弱く遺物のため、普段はなかなか実物をご覧いただくことができません。この展示が、多くの方々にとって、本物の木簡に親しく接していただく機会となれば幸いです。

今年の主役は、今からちょうど五〇年前、平城宮跡発掘調査部が発足した年に平城宮跡・内裏北外郭官衙のゴミ捨て土坑・SK820より出土した木簡たちです。このSK820出土木簡は総計が一八〇〇点以上ののぼり、また内容的にもバラエティに富んでいます。それ以前の平城宮跡出土木簡が四〇数点に過ぎなかったことを考えれば、まさに空前の大出土といえるでしょう。当時の調査員たちの喜びや驚き、それ以上に調査や保管の苦勞はいかばかりだったか——往時の情景に想いを馳せつつ、その中での試行錯誤を通じて築き上げられた木簡学の基礎部分についても理解を深めながら、お楽しみいただければと思います。

最後になりましたが、平城宮跡発掘調査部（現、都城発掘調査部平城地区）の創設五〇周年を慶祝するともに、今回の展示にあたり、ご協力を賜りました関係機関、関係者の皆様に、あつく御礼申し上げます。

二〇一三年一〇月

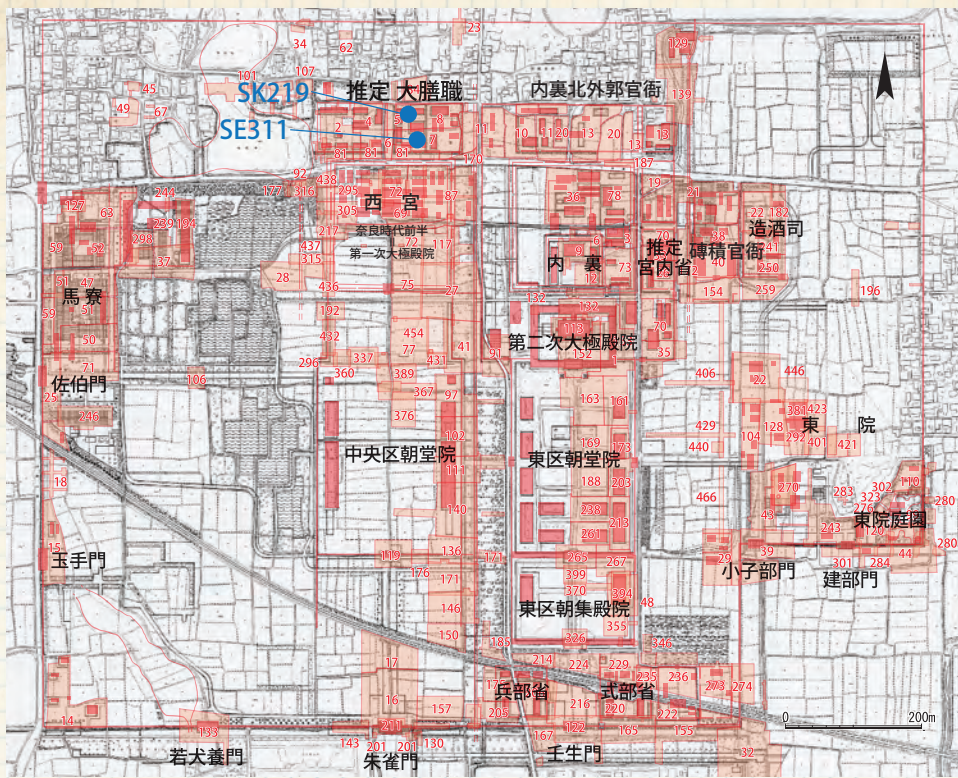
独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所長

松村 恵司

Handwritten text in cursive script, likely a list of acknowledgments or a detailed report, partially obscured by the printed text above.

1. このリーフレットは、奈良文化財研究所平城宮跡資料館でおこなう秋期特別展「地下の正倉院展—木簡学ことはじめ」にちなんで編集したものである。
(会期 2013年10月19日(土) - 12月1日(日))
2. 木簡の保存に万全を期すため、会期中に2回の展示替えをおこなう。
3. 木簡の写真は、特に明記したもの以外は、原寸の75%に縮小して掲載した。写真下のアラビア数字は、今回の展示における通し番号を示す。
4. 木簡の写真は、原則として、文字のある面をすべて掲載することとした。ただし、一部、片面のみを掲載したものもある。その場合、通し番号の右に表裏を記した。
5. 本特別展は、当研究所都城発掘調査部史料研究室が企画し、企画調整部展示企画室の全面的な協力を得た。
6. 本書の編集は、史料研究室 山本祥隆と展示企画室 渡邊淳子が担当し、展示企画室 加藤真二・中川あやが協力した。本文の執筆は、山本がおこなった。木簡の写真は、企画調整部写真室 中村一郎が撮影し、鎌倉綾が補佐した。作成にあたり、史料研究室 渡辺晃宏・馬場基・井上幸・方国花が協力し、展示企画室 市原夕貴・廣瀬智子が補佐した。
7. 今回の展示にあたっては、以下の諸機関のご後援を得た。記して謝意を表する。
国土交通省近畿地方整備局飛鳥歴史公園事務所・奈良県教育委員会・奈良市教育委員会・読売新聞社・近畿日本鉄道株式会社・奈良交通株式会社・株式会社南都銀行・木簡学会

プロローグ はじまりの木簡たち



平城宮跡最初の木簡の出土地点

木簡の内容から、奈良時代後半、SK219・SE311を検出した区画は平城宮で勤務する官人たちの給食センター・大膳職であった可能性が高まった。朱雀門の真北、平城宮の中軸線上に位置し、当初は内裏の存在が想定されていた地区である。(赤色数字は、発掘調査次数)



推定大膳職 土坑 SK219 発掘調査 (1961年1月)



推定大膳職 井戸 SE311 発掘調査 (1961年9月)

《木簡》の誕生とそれ以前の木簡たち

木簡の「簡」はなぜ竹冠か。それは、木簡とともに竹簡も多用する中国で、正式には木製のものは「牘」と称し、竹製のものを「簡」と呼ぶから。「木簡」は日本風の(やや不自然な?)呼び名なのである。平城宮跡最初の木簡出土は、《木簡》という用語が定着する契機ともなった。一方、戦前に報告された出土事例も、少数ながらも存在する(三重県柚井遺跡出土木簡や秋田県弘田柵跡出土木簡など)。これらは言わば、《木簡》以前の木簡たち。現在その一部は所在不明となっているなど、「早すぎた」出土が惜しまれる面もある。

● 1930年 弘田柵跡 (秋田県)

● 1928年 柚井遺跡 (三重県)

タクサン！ナンカ字イ書イタルデー
平城宮跡で最初の木簡出土、その瞬間のナマの肉声。一九六一年一月二四日、小雪がちらつく真冬の発掘現場に響いた第一声は、日本の木簡学の本格的な幕開けを告げる号砲となった。

声の主は寺田崇憲氏、当時奈文研技術補佐員。「タクサン」は田中琢氏、のちに奈文研所長に就かれる田中氏も、当時は二〇代の若き調査員である。

この発見以前は、研究者たちの間でも、古人たちが日常的に木に文字を記していたという認識自体が希薄であった。当然、保管や調査のノウハウなど存在しない。「木簡」という用語すら確立していなかった感もある。

最終的に、のちに大膳職跡と推定されるに至るこの現場の、これまたのちにSK219と名づけられるこの土坑からは、計四〇点の木簡が出土した。だが、折しも季節は春へと向かい、気温は日々高くなる。木簡はホルマリン水に浸けて保管することになったが、それだけで劣化を食い止められるだろうか―この木簡たちを真夏の炎暑から守るため、奈文研では初となる電気冷蔵庫の購入が決定された。

平城宮跡 最初の木簡たち



3

2

1

1961年 推定大膳職
SK219(40点)

1961年 推定大膳職
SE311 (2点)

平城宮跡の木簡出土

1〜3は、いずれもSK219から出土した木簡。

1は、あの日最初に見つかった木簡。現場に騒ぎを巻き起こした張本人である。調査員たちの驚きや興奮、そして困惑のなかでのドタバタ劇を、この木簡はどんな思いで見守っていたのだろうか。

2は主殿寮が火を請求する木簡。単に「火」としかないが、火種のことであろう。主殿寮は宮内省被管で、殿舎の維持・管理や天皇が行幸する際の諸施設の設営などを担当した。

3は柏の葉につけられた付札。小振りだが、左右の削りや表面の仕上げは実に丁寧。柏の葉には青物と干物の二種類があり、皿や容器のフタとして使われていたようである。

つづいて、同年夏の現場では桤板の残る大きな井戸・SE311が見つかり、中から二点の木簡が出土した。ただ、この井戸は都が平城京から長岡京、そして平安京へと遷り、不要となったのちに埋まったものであるから、木簡の年代も平安時代初頭に降るようである。ちなみに、SK219出土木簡の年代は天平宝字七年(七六三)前後と推定されている。

こうして、平城宮跡出土木簡の総数四二点という状況で、一九六三年八月を迎えることとなる――

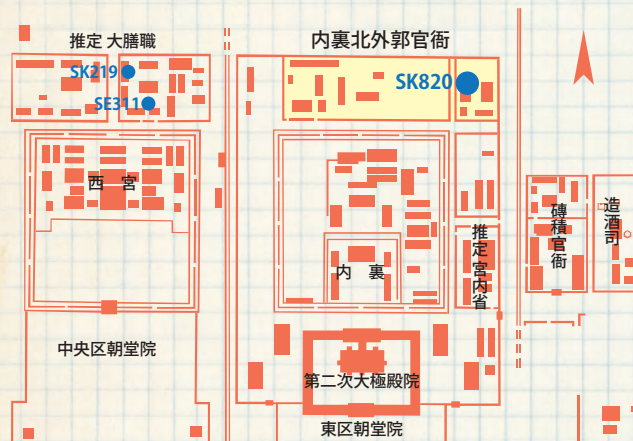
←1963年 内裏北外郭宮衛
SK820(1843点)へ

I 空前の大出土！SK820

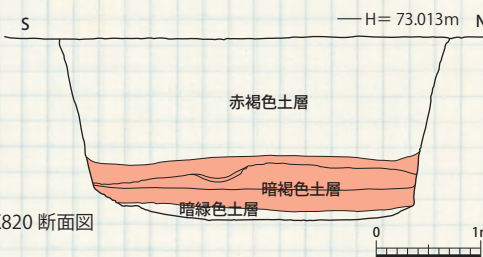
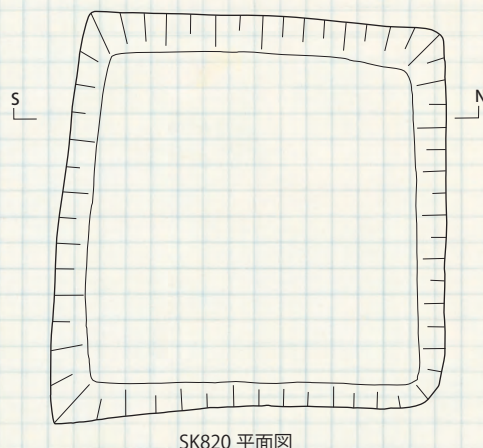


SK820の発掘

完掘の結果、SK820は検出面からの深さが約二・三mで、下に向かって少しずつ狭まり、底面は約三m四方であることもわかった。人が何人も入れる巨大なゴミ捨て穴である。



内裏北外郭官街 SK820 位置図



SK820 断面図

木簡が出土したSK820の全容

断面図中の「暗褐色土層」(赤色部分)から、木簡をはじめとするさまざまな遺物が出土した。その上は遺物が少ない赤褐色土で覆われており、この土坑を掘ったのち間もなく、短期間の間に多量の遺物が捨てられ、その後一気に埋め戻したことを物語っている。



SK820 発掘調査風景 (1963年8月)

当時を知る人たちにとって、一九六三年は、記録的な猛暑の年として記憶されているらしい。そんな酷暑のなかでの夏の調査が、木簡研究の歴史の中でまさにエポックメイキングなものになるうとは、誰にも予想できなかっただろう。

八月、平城宮跡北端に近い発掘現場で、やや奇妙な土坑が見つかった。平面形は一辺四mほどの方形で、井戸と見まごうほど整ったかたちをしている。掘り下げると、検出面より一・五mを超えたあたりから、急激に遺物の出土が多くなった。土器、瓦、曲物や檜扇、植物の種まで、多士済々の遺物たちが眠っていたのである。断面観察からは、これらがみなゴミとして一時に捨てられ、短期間の間に埋められたことも判明した。

この土坑・SK820の中には大量の木簡も埋まっていた。その数なんと一八〇〇点以上！最初の発見からわずか二年半後、まだまだ手探りの調査がつづく時期に、平城宮跡出土木簡の総数は三桁を跳び越え、一気に四桁の万台に突入したのである。もう、とても冷蔵庫には入りきらない！

木簡たちは種類も多種多様であった。特に扱いは困ったのは削屑であろう。まるで鯉節のような削屑は、それこそ触れただけでバラバラに壊れてしまうほどに脆い。割り箸状に裁断されて、まったく釈読不能なものも多かった。こんなもの、どうやって扱えと言うのか——調査員たちの悲鳴や嘆きが聞こえてくる。

たくさんの細片たち
出土する木簡のほとんどはこんなモノ…

割り箸のように裁断された木簡たち

細く細かく分断されて、もはや一文字も読めないものも多い。実際には、このような「読めない木簡たち」が出土木簡の多数を占める。

※縮尺は任意

鯉節のような削屑たち

木簡は、文字面を刀子（小刀）で削り（と）れば何度でも再利用できる。その結果の産物が削屑（けずりくず）であり、木簡独自の特性を示すものといえるが、まるで鯉節のような木っ端はとにかく扱いに困る難物でもある。

さまざまなたち
かたちも、なかみも、多種多様…

何度も重ねて字を書いた木簡 それぞれの文字はほとんど判読しがたい。熱心な勉強の成果か、ヒマにまかせた落書きか。



10



「西宮」と書かれた木簡1 上の「東一門」からは、下の「東二」は「門」の字が省略されていることがうかがわれる。

9



兵士に関わる木簡 表面の「火長」は、一〇人一組の兵士集団の隊長のこと。何か事件でも起こったのか。

14



クセのある筆跡の木簡 いいかげんな書きぶりとみるか、それとも流麗な達筆とみるか… あなたはどちら？

4



同じ字を繰り返し書いた木簡 文字の練習だろうか。いつの時代にも真面目な人はいたようである。

11



文章が墨線で抹消された木簡 用が済んで不要となったことを示すのか、あるいは単に書き間違えたのか。

13



紐が残る木簡 類似品の使用法を示唆する。紐まで残っているものはごく珍しい。

12 裏



17

「西宮」と書かれた木簡2 表面上半の文字は半分しか残っていないが、

9の文字と見比べればよく読めるだろう。



切り込みがある木簡 文字はほとんど読めなくなっているが、上端の切り込みは深くするどい。

8



20

丸い栓のような木筒

特徴的な丸いかたちからは、^栓の
可能性が考えられる。すると「十五
斤」は中身の重さだろうか。



22

二枚の板を桜皮で綴じた木筒

横からみると、二枚の板が重なって
いることがよくわかる。何かの製品
の一部であろう。

等間隔で横線が引かれた木筒

裏面には文字はなく、一定間隔で墨線が引かれるのみ。思い浮かぶのは… そう、^{もじ}物指！



21

ほぼ同型で孔が開く木筒たち
それぞれの横線や孔の位置がほぼ揃う。
用途不明の、ナツの木筒。

23



かわった木筒たち

こんなのもありました…

太い材に書かれた木筒

断面は正方形に近く、ほとんど角
材のようである。よくみると、裏
面下端には^{えぐ}りも入っている。



19

何のため？

似たような木筒たち

薄く小さな^て札状の木片はそれぞれ
かたちがよく似ており、書かれる
のはいずれも繊維製品の名前…
何に使ったか、わかりますか？



24～26

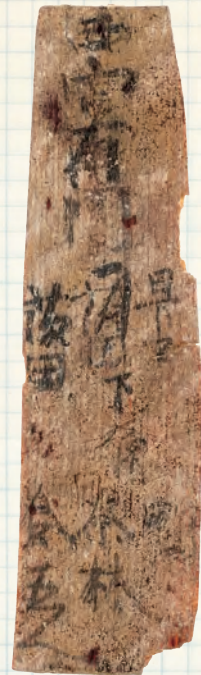
※ 19、22～26の縮尺は任意

II 木簡学の基礎、確立

これが、日本古代木簡の三本柱

荷物に括りつける荷札と、倉庫などでの管理用の狭義の付札の2タイプがある。荷札には発送者の名前や住所が記され、紐をかけるための切り込みを持つものも多い。付札は、内容は物品名だけの簡潔なもの目立つが、端正な作りのものが多いのが特色。丈夫で水にも強い木の特性を活かした使用法といえる。

門を守衛する兵衛（兵士）の配置記録の木簡。真ん中の人名には印がついており、実際に使われた様子もつかえる。

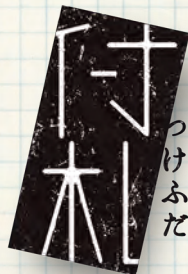


27



文字が木簡を木簡たらしめる不可欠要素である以上、やはりもっともベーシックな機能は文書である。その中には物品管理や人員配置の記録、他者に宛てた書状や呼び出し状、関所を通過するためのパスポートまで、多彩な内容を含む。

SK820出土木簡を総覧すると、さまざまなタイプの木簡がバランスよく含まれていることに気づく。どんな種類の木簡がどのように使われていたか、古代日本における木簡利用の実情をうかがう重要なサンプルとなったのである。文書、付札、そして習書。多くの例外を含むのはもちろんだが、やはりこの三つの用法こそ、日本古代木簡の三本柱と位置づけられよう。ここに木簡学の基礎が確立することとなり、それは現在の研究水準においても、高い有効性を保持しつづけていると言える。

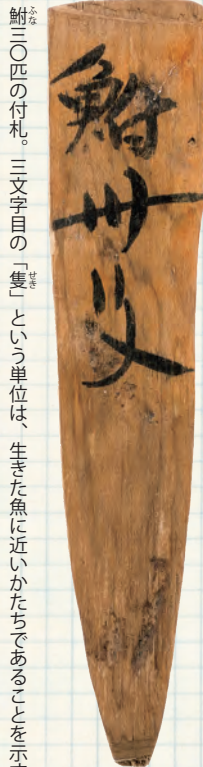


つけふだ

大宰府から送られた綿の荷札。西海道産の綿は、貴族も好む高級品であった。



32



鮒三〇匹の付札。三文字目の「隻」という単位は、生きた魚に近いかたちであることを示す。

65



しゅうしょ

奈良時代には、建築部材や各種の木製品など、人びとの身近に多くの木材があった。そのため、端材や不要品に文字の練習をした習書は、日本古代木簡の柱のひとつに据えられる。なかには文章をフレーズ単位で書きつけたものもあり、官人たちの苦勞や勤勉さが偲ばれる

54 裏

全面にびっしり書かれた「皇」「未」などの文字。文字、文字。「雁」が異体字「鴈」になっているのも興味深い。

のちの調査で出土した文書木簡



46



45



29



59



10



あんじよ

59 が SK820 出土の文書木簡、29・45・46 がのちの調査で出土した文書木簡の事例である。

59 は中務省の少丞（三等官）である池田足継が藁を檢校（ニチエツク）したことを記す。数字は「陸」など画数の多い字（大字）が使われている。

29 は木材の進上状。炭の進上状も近くで出土している。59 の藁といい、大勢の人が集まる都では、さまざまな資材が必要とされた。

45 は「西坊」に貸し出した玉箆に関する記録。受領の責任者や返却の有無も記されており、段階に応じて追記されていった可能性も考えられる。

46 は飯の請求状。「大人」は請求者の名前。食料を請求する木簡は数多いが、これは「飯（二升許）」と、やや自信なさげなのが微笑ましい。

のちの調査で出土した付札



つけふた



67



51



34



48 表



33



49



69



66



33・48・49がSK820出土の付札、その他がのちの調査で出土した付札の事例である。

33・49はともにアワビの付札。形状も似通っている。アワビは「鮑」または「鰓」と書く。49は「鰓」となっているが、「鮑」の例もあるから、これもアワビのつもりで書いたのだろう。

48は大宰府からの綿の荷札。上下両端に切り込みをもつ。SK820からは綿の荷札が多く出土したが、その後はほとんど見つからない。

34は伊勢国からの米の荷札。二人が三斗ずつ負担し、あわせて六斗で一俵としている。荷札には切り込みと尖りを併せ持つタイプもある。

51もアワビの付札。33・49とよく似ている。ただし、49が「生」のアワビなのに対し、こちらは「熟鰓」である。熟鰓はほかに例がないが、あるいははなれ鰓のことであろうか。

66は上総国からの荏胡麻油の荷札。荷札の切り込みは上下両端にある場合と上端のみの場合があり、時には下端のみという珍しいものも見つかる。

67は雑魚の「腊」の付札。腊は干物。非常に丁寧に作り込まれ、文字もよく整っている。

69は若狭国からの塩の荷札。若狭は塩の一大生産地である。文字はほとんど読めないが、上下両端に切り込みがあるのはよくわかる。



38



42 表



71



40



58



38 には「売」「買」という関わりの深い二字が書き連ねられている。書き手の思考回路が垣間見えるよう。71には「末主使」の三文字が、三回つづけて書かれている。習書は一字単位のみでなく、数文字の単語単位や、時には文章のフレーズ単位でなされることもあった。

58 には「売」「買」という関わりの深い二字が書き連ねられている。書き手の思考回路が垣間見えるよう。71には「末主使」の三文字が、三回つづけて書かれている。習書は一字単位のみでなく、数文字の単語単位や、時には文章のフレーズ単位でなされることもあった。

42 は、不要になった檜扇を習書に転用したもの。檜扇はヒノキの薄い板で作った扇で、下端には要の孔も開けられている。その性質上、習書はさまざまな材になされる傾向にある。

38 には、ほとんど重ねるようになって、多くの文字が書かれている。裏面の一部は天地逆に記されるなど、何度かにわたって書かれた様子もみえる。

40・42・58・71がのちの調査で出土した習書木簡の事例である。

38 がSK820出土の習書木簡、40・42・58・71がのちの調査で出土した習書木簡の事例である。

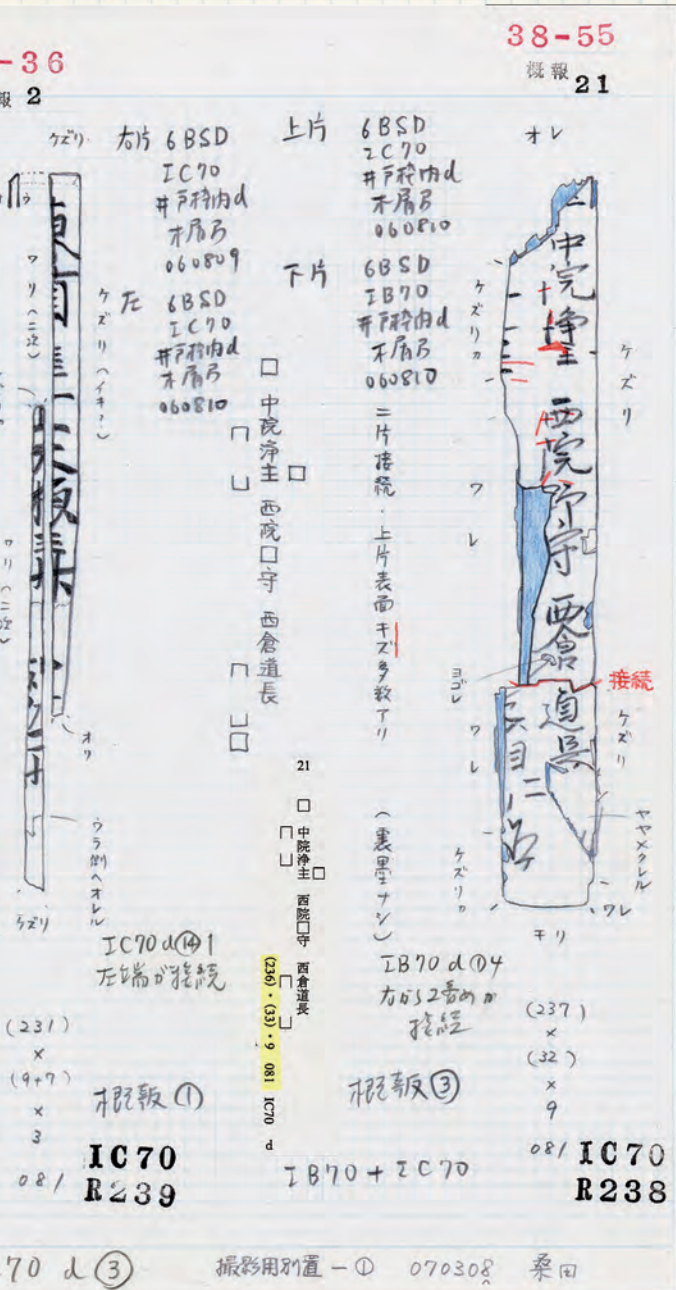
Ⅲ 広がる木簡学

木簡研究の基本

記帳ノート

木簡を読む——「言うは易し、行ふは難し」とはこのことである。木簡の文字は、薄れていたたり、クセが強かったり、割れて半分しか残っていなかったり、一筋縄ではいかない難物が多い。もちろんなかには美しく読みやすい筆跡のものもあるが、そういった木簡は少数派である。

そのため、木簡を読むには「記帳」が欠かせない。記帳は、いわば古代人の筆記を追体験する作業。墨線の輪郭をなぞって中を塗りつぶすのは御法度で、筆の動きや流れを追うことが最重要。その成果が記帳ノートであり、ここにはモノとしての木簡の観察記録もつまっている。



現在の記帳ノート

50年間の試行錯誤をへて、現在の記帳は格段に精緻さを増している。特に四周の状態や表面のキズなど、モノとしての観察結果が細かく記録されるようになり、必要に応じて色鉛筆なども使われている。

初代記帳ノート

おそらく当初は「記帳」という呼び名すら確立していなかっただろう。手探りで調査・研究のなかで編み出された手法は、先輩から後輩へ連綿と受け継がれ、木簡研究の基本となった。(左端に見えるのは10頁の59の木簡)



各有男女官亦同。癸丑授美濃守從四位下等藤原麻呂從四位上介正六位下藤原朝臣麻呂從五位下。○戊午詔曰。國輸絹繩貴賤有差長短不等或輸絹一丈九尺或輸繩一丈一尺長者直貴短者直賤事須安穩理應均輸絲有精龜賦無貴賤不可以一槩強貴賤之理布雖有端稍有不便宜隨使用更定端限所司宜量一丁輸物作安穩條例自今以後宜蠲百姓副物及中男正調其應供官主用料等物所司宜支度年別用度並隨鄉土所出付國役中男進者中男不足者即以折役雜徭於是太政官議奏精龜絹繩長短廣闊之法語在格中。○丁巳車駕幸和泉離宮免河內國今年調賜國司祿有差。○十二月壬申太政官處分始授五位及從外任遷京官者會賜祿且仍入賜例。○丁亥令美濃國立春曉抱禮泉而貢。於京都爲禮酒也。

文獻にみえる「中男作物」

続日本紀養老元年（七一七）二月戊午條。元來正丁（二二〜六〇歳の男子）には調の三〇分の程度の副物が科され、また中男にも正丁の四分の一の調がかけられていたが、両者を廃止し、中男作物の制を開始することが記されている。（色付が該当部分）



出雲国からの贄の荷札。「若海藻」はワカメのこと。端正な筆跡で「贄」の字もよく読める。

75

木簡で明らかになった

租税の実態

多彩な内容を含むSK820出土木簡。その意義は多岐にわたるが、租税の実態の解明に果たした役割も大きい。

例えば贄。贄は海産物を中心とする食品を貢上する税目で、主に天皇の食膳に供される。しかし贄は律令に規定がみえず、続日本紀以降の歴史書にも登場しない。十世紀に編纂された延喜式には詳しく規定されているが、八世紀段階の姿はべールに包まれていた。一方、ときに「荷札のデパート」と称されるSK820出土木簡には、贄の荷

札も多く含まれていた。それらにより八世紀の贄の様相をうかがう手がかりが得られ、研究が飛躍的に進展したのである。

中男作物も同様の例として挙げられる。中男作物は、養老元年（七一七）に調副物（調の付加税）と中男（一七〜二〇歳の男子）の調を廃止した代わりに新しく設けられた税目で、こちらも律令には規定がない。その中男作物の荷札が、SK820からは八出土したのである。それらにはいずれも、貢進者の個人名を記さないという、調の荷札とは異なる特徴が認められる。この書式は、中男たちの集団労働により官司の必要物資を調達するという、中男作物の租税としての特質を反映したものとされる。



武蔵国からの贄の荷札で、品目は「鮫」。鮫はクキと読み、大豆から作る調味料の一種。

81



82

越中国からの中男作物の荷札。鮫（一〇〇匹にふさわしい、大きくて立派な荷札。文字も実に堂々としている。



SK820 出土の紀年銘木簡 ※木簡の縮尺は任意

通常、荷札には荷物の発送作業の過程で年月日が書き込まれるが、月または年までしか記していなかったり、まったく書かれていないものもある。もちろん、文書木簡のなかにも年紀を有するものはある。



SK820 から出土した土器群

共伴遺物や遺構に実年代を与える 紀年銘木簡

もちろん荷札の作製から廃棄までには一定の間が必要だが、特に新鮮な海産物などは、荷札の年紀と捨てられた時点とのタイムラグが小さい可能性が高い。SK820 出土の荷札は、二〇年もストックされたらしい塩や綿わたのものをのぞけば年紀が天平十七〜十九年（七四五〜七四七）に集中しており、SK820 が天平十九年の後半頃に埋められたことを明らかにした。また、同時に出土した土器群にも実年代が与えられ、現在も編年研究のための良好な基準資料となっている。

木簡研究の広がりには、「木簡の研究」だけに留まらない。特に紀年銘木簡は、出土遺構や共伴遺物に対して重要な働きかけをする。

紀年銘木簡とは、年紀が書かれた木簡のこと。例えば「天平元年」と書かれたアワビの荷札が見つかれば、その遺構が埋まったのはその頃で、一緒に出土した土器や瓦なども同じくらいの時期のものとする。通常、考古学では二つのもののどちらが古く、どちらが新しいか（相対年代）しか決めがたいが、紀年銘木簡は、西暦何年という絶対年代を示してくれるのである。

「天平十九年七月」は、SK820 出土木簡の年紀としてはもっとも新しい。SK820 はこの後、それほど時間を置かずして埋められたのだらう。



83

備後国びんごからの鉄の荷札。下半に「天平十八年」の年紀がみえる。荷札としてもなかなかの優品。



80

調として納められた鉄の荷札。割れて上半は読みづらいが、下半の「天平十八年十月」はよく読める。



77

2013年10月19日

編集・発行 独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所

〒630-8577 奈良市二条町2-9-1

<http://www.nabunken.go.jp/>

表紙デザイン 市原 夕貴

印刷 能登印刷株式会社